

ウォライタでの 生ぬるいフィールド生活

調査を支える遊びの時間

若狭基道 わかさ もとみち / 明星大学等非常勤講師、AA 研共同研究員

人間とは何か。真摯に究めなければ

徹底した烈しいフィールドワークを敢行せよ。

そこでは 24 時間が勉強だ。そこからこそ

新たな知的貢献が生まれる——その通り。

だが、もっとゆる〜いフィールドの世界がある。



ホテルが断水しているため、水汲みに
行ったD君。私も邪魔しに行った。

フィールドでの快適ホテル生活

少なくとも私の場合、1日の3分の1は寝ている。残りの時間も半分は生物として必要な活動や研究に関係のないことをしている。これはフィールドでも同じである。従って、これらの時間が快適かどうかはフィールドワークにとって決定的である。

私の専攻は言語学で、主としてエチオピア南西部のウォライタと呼ばれる地域で、2007年の国勢調査によると母語話者人口1,627,784人のウォライタ語の調査を行っているが、幸いにも快適な拠点を得ることが出来た。それはボディティという町のGホテルである。当地随一の高級ホテルであり、私は当然その一番良い部屋に泊っている。宿泊料は近年の物価高騰の煽りで昨春には1泊50ブルにもなってしまったが、日本円に換算すれば数百円であろうか。

日本のビジネスホテルよりは格段に広く、調査用にテーブルと椅子を追加で入れて貰ってもまだ相当余裕がある。エアコンはないが、現地の気候では必要ない。シャワーと洋式トイレ完備。お湯は出ないが現地の気候ではこれまた必要なし。但し、ほぼ常時断水しているので大きなポリ容器で運び入れて貰った水で何とかすることになる。

Gホテルを選んだのは、首都アジスアベバで知り合ったウォライタ語のインフォーマントA氏の推薦だからである。私は初期の基礎的な調査は首都で行っていたのだが、いずれ現地に住んで本格的な調査をしたいと思っていた。そこで尋ねてみるとA氏は「ウォライタに泊れる所は2つしかない」と断言。ならば信じるしかない。その2つがGホテルとウォライタの中心部ソドにある別のホテルだったのだが、A氏の実家に近いのはGホテルであったし、ごんまりとした町の雰囲気も気に入ったので何となくそちらを選んだ。結果としてこれは大正解であった。

ウォライタグルメ堪能の日々

まず、レストランの食事が美味しい。「不味くて食えない」なんて、贅沢だ」というのは嘘である。想像を絶する不味い料理がこの世には存在する。それまでエチオピアでは全く口に合わないものを時として供され、こう言っては申し訳ないが辟易もしていた。だから、このホテルにも期待していなかったのだが、名物の牛肉を使った数々の美味しいメニューにはあっと言う間に虜になった。例えば左下写真の料理など、見るだけで食慾を催すではないか。

厨房の従業員も親切で、仮に総て売り切れてしまっても、賄い用の食事を分けてくれたり、店で卵を買って来て炒めてくれたり、特別メニューを出してくれる。最近は売り切れそうになるとわざわざ教えてくれたり、予約して確保しておくよう勧められたりもする。だが、売り切れたら仕事を上げられるのに、私の予約した料理を作るために彼等を待機させるのは何とも心苦しい。私に出来るせめてものことは、一刻も早く晩酌を始め、一刻も早く夕食を終えることである。

その晩酌であるが、Gホテルでは冷たいビールが飲める。停電はしょっちゅうだが、最近発電機を導入したので、ぬるいビールは頼まなければ出て来なくなった。もっとも最近は「ドラフト」というジョッキで飲む生ビール粉いのものが多少廉価なので人気があり、私も釣られてしまうことが多い。ホテルでたった1

私の泊っていたホテルの部屋。



細く切った牛肉を焼いた G ホテル名物「ズルスルトゥプス」。

台のテレビを何となく眺めながら嗜む晩酌も格別である。

日曜日の朝には、初代オーナーの末っ子で現在ホテル業務を取り仕切っているD君やその仲間達の特別メニューの御相伴に与ることもある。レストラン用に屠殺したてのほかほかの牛肉をD君が競り落として来るのだが、それを内臓も含め、生のまま早速食べてしまうのである。寄生虫に目を瞶ればこれまた美味である。飲み物はビールとワインとコーラを混ぜたもので、これほど肉料理に合うものもなからう。自分は世界一幸せなフィールドワーカーではないか、と本気で思ってしまう一時である。

優雅なウォライタ社交

D君は客室の1つを自分の部屋にしている。業務上泊る必要があるからだが、傍から見れば仲間との溜まり場となっている。勿論、私もその一員である。

調査に行っているとは言え、「勉強」したくない時だってある。また、私は不意の来客や、どこかに連れて行って貰える突然の機会に備えてスケジュールには余裕を持たせてあるのだが、それが無駄になってしまうこともある。そうした場合、レストランに行く手もある。お茶だけ飲むことも可能なので、現地では大切な社交の場になっている。行けば誰か話し相手がいるだろうし、従業員と話しても良い。こうしたことを通じて貴重な情報が得られることも多い。

だが、厄介な人が来ることや、不愉快な質問攻めから抜け出せなくなることもある。そこで好きな時に入れて好きな時に出来るD君の部屋を訪れることになる。誰もいない時もあるが、いるのは確実に気の合う仲間ばかりである。最新の娯楽機器もあり、楽しい。エチオピア全土での共通語的性格を持つアムハラ語によるコントのビデオCD (VCD) の存在はここで知った。

海外から放送される短波ラジオのアムハラ語ニュースに彼等が耳を傾けているのを目の当たりにすると国内メディアの報道を鵜呑みにすることの危うさにも気付く。時には彼等の不満を直接聞くこともある。主としてD君なのだが、堅苦しいインタ



ホテルの庭で唐辛子を搗く従業員達。右から2人目はD君のお母さん。



日曜朝の特別メニュー、生の肉と内臓。



「ドラフト」を注ぐ従業員。



ホテルのレストランで語らうD君(左から2人目)と仲間達。右手後方に筆者の泊っていた部屋の小さく写っている。

Gホテル近辺の住宅街。



ビューでは聞き出せない、現在のエチオピアやウォライタの問題点を突き付けられ、反論もあるが考えさせられることも多い。いずれ自分なりの答を出さなければならないと思っている。だが、それと同時に、色々話せる友人が出来たことにも何だか嬉しくなり、自分は世界一現地に受け入れられているフィールドワーカーなのだ、と錯覚するのである。

因みにD君はウォライタ人ではない。彼自身はウォライタ生まれのウォライタ育ちで、ウォライタ語も流暢だが、両親は商売のために移住してきたアムハラ人である。わざわざウォライタまで行ってアムハラ人と交流するというのも何だが(しかもアムハラ語を使ってしまう場合も多い)、D君は人をもてなしたり笑わせたりすることにかけては天才的であ

り、一宿泊客として彼と交渉しなければならぬことも多く、自然と仲良くなってしまったのだから仕方ない。それに御蔭で「ウォライタ語＝ウォライタ人の話す言葉」といった偏見も払拭されたのだから、これはこれで良いフィールド経験であろう。

「遊びます」

嘗てAA研にいらっやったK先生と初めてお会いしたのはアフリカ某所である。私がアフリカに行ったのも実はそれが初めてだったが、その時に先生が仰った「遊んでおけよ」というアドバイスが忘れられない。もう少し語弊のない表現をすれば、フィールドの現場では「調査」をしない時間がかなり多く、だからこそその時間を大切にしなければならない、ということであろう。賛成であ

る。とは言え、かく言う私も最近では2ヶ月を超える滞在が難しくなり、能率優先、と言えは聞こえが良いが、単に遠しいだけのフィールドワークが増えた気がする。今の時世、私も短期決戦型の調査が出来るように変わらなければならないのではあろうが、それは何だか寂しい気がする。

ともあれ、蔑ろにされがちでも私にとっては大切なフィールドでの暢気な時間がどのようなものなのか、その一端を書いてみた。裏方従業員達との交流等、書き残したことも多い。今後も書くべきことは出て来るだろう。何しろ、到着予定日を電話で告げると、部屋に花まで飾って待っていてくれるD君とGホテルである。今後も遊びに行かない訳には行かない。